

“ぜひ現地にきて....”

水俣病新認定患者とチッソの交渉

血書し深夜まで訴え

島田 訪問の意向は示す
社長



島田社長（左）と話し合う告発する会代表と疲れて社長の前で横になる患者たち

“自主交渉を前提に” 患者側

交渉は同日午前十時半からチッソが始まったが、午前十一時すぎに東へ会議約三百人が同本社に乗り込

み、交渉会場を取り囲む形で廊下

水俣病新認定患者・家族の川本繁夫さん(72)「水俣市」ら六人とチッソの東京での二回目の補償交渉は、八日深夜まで行なわれた。チッソはこれまでの中央公害審議会持ち込みの態度を変えず、患者側の「まず水俣に来て、患者家庭を見たい」という要求には島田社長が「十五日に現地へ行く」と約束したが「自主交渉を前提にせよ」という患者側と折り合わず、結論は出なかった。

久山岡事務も同席した。

正午すぎにチッソ側は前日患者側が出した「誠意ある回答」を求める要求書に対する回答文書を出したが、これは「早期、円満解決のため中央公害審議会にお願いする」という、これまでのチッソの主張そのままのものがだった。

人は被害を訴え、切実に「誠意ある回答を求め」と、血書して、島田社長に「水俣に来て、患者家庭を見たい」と迫った。しかし島田社長は「まず県の認定資料を先に」と患者側の要求をこぼみつけた。午後一時ごろから患者側は騒動と疲れから会場内に糞尿などをかきつけて横になり、柳田タマ子さん(73)は高血圧症状を起して会場の医師室のベッドに運ばれた。同四十分ごろ藤井事務も「肉体的苦痛」を訴えて「会場を出たい」と申し出、久山岡事務が患者側に「出してやってほしい」と口をそえた。結局、患者側付き添いの医師の警護を受けて、会場内の長イスに横になったが、久山岡事務に対し「同僚の苦し

みはわがずでも、患者の苦しみは
わかつていない」と告発する会側
から激しい追及の嵐があがった。

夜に入り、会社側は同八時二十
分、打ち合わせのための休憩を

申し出て、約一時間にわたって協
議した。この結果、島田社長は
「中央公害審判による解決の態度は
変わらないが十五日に水俣へ行き
たい。そのさいは出来るだけ多く

の患者家庭を回って実情を見、直
接話を聞かせてもらいたい」と水
俣行きを約束した。しかし患者側
は「自主交渉を前提とした水俣行
きでなければ納得出来ない」と反

発。同十時四十五分ごろ、交渉打
ち切りを求めて島田社長が席を立
ちかけたが、ははまれ、深夜まで同
着のやりとりが続いた。

(東京支社)